

第5回山口県立大学将来構想検討委員会の概要

- 1 開催日時 令和4年1月19日(水) 14:00~15:45
- 2 開催方法 オンライン開催
- 3 出席者 委員 12名、事務局 11名
- 4 議題 山口県立大学将来構想(案)について

委員からの主な意見

- ・多様な学生を呼び込むという点では、高齢であっても非常に元気な方、まだまだ社会参画したいという方も少なくない。高齢者等が学び続けられるような仕組みについても、今後の県立大学に期待したい。
- ・社会福祉士が地域で対応する課題の範囲が非常に広がり、かつ深刻になっている。大学4年間で学びきれものではなく、社会に出てからも大学と連携しながら解決していける仕組みが築けるよう、大学に支援を期待する。
- ・県内の地域ごとに推薦枠を設定するような入試制度や、県内大学との連携においては、短大卒業者が編入学できる制度など、卒業した学生が地域で活躍することにつながるような入学の仕組みの検討もお願いしたい。
- ・今回のコロナ禍においては、保育の現場においても、公衆衛生など沢山の学ぶべきことがあった。そういった点も含め、大学の研究で得られた知見を現場にフィードバックして保育士のスキルアップを支えるなど、センター的な機能の構築に期待している。
- ・今後、高大連携を深めていく上では、例えば、大学が開催するセミナーなど連携活動に参加した生徒を色々な角度で評価して、それが推薦型入試に反映され、評価される仕組みなど、高校側にもメリットがあり、積極的に協力しやすいような取組を検討いただきたい。
- ・高等教育機関で学ぶ意義として、学ぶことの喜びが得られることがあり、構想の中に学ぶことの喜びが得られる大学にすることを盛り込んでいただければと考える。
- ・リカレントと現役世代の教育を上手く融合させることにより、色々な人の意見を聞いて自分で考え、自ら発信できるような対話力のある若い人が育つようになればよいと考える。
- ・コロナで陽性となった外国人への保健師による積極的疫学調査などでも言葉の問題があった。県立大学には国際文化学部があり、資格の取得を目指すような社会福祉学部、看護栄養学部においても、国際的な視点など、大学内で学生同士が交流しながら学び合えるような取組を充実させていただきたい。
- ・また、コロナでは宿泊療養施設に子どもが入られたときに、子どもの食事が大きな課題となった。県立大学には栄養学科もあり、そういった県内で課題が生じたときに、大学の特性も活かし、社会的貢献として広く対応いただける体制も構築していただければと考える。

- 産官の中に大学がしっかり入り込んでいただき、生の声を聞くことにより、実践力のある人材育成につながればと期待する。デジタルについても、単に他を追従するのではなく、県立大学もしくはその卒業生が新しい世界を切り拓いてくれることを期待する。
- 今後、人材面ではデジタルに強い人材が不可欠となるが、その前提として、地域や産業に興味を持つような学生を育てる教育プログラムも重要となることから、PBLやインターンシップなどの企画を充実させていただきたい。
- 課題解決のニーズを起点とした研究を進めることで高い成果が期待されるとともに、ニーズと研究をマッチングさせる上では、コーディネーターのスキルが重要であり、地元金融機関との連携も有効である。
- 学生が減少していく中、大学間でパイを奪い合うのではなく、県内の大学が特長を活かして連携し、地域に貢献していくことが必要と考える。
- 学生から見て、成長させてくれる大学かどうかという視点も大切になる。
- 地域貢献の窓口が地域共生センターであることを知らない組織・団体が多いと思われるため、その周知や役割の明確化が必要と思われる。
- 変化の激しい社会で未来をしっかりと生き抜けるよう、若者の礎を築く大学の役割はますます重要になっている。
- 次の中期目標期間に向けては、いい計画等を立てていただき、県民の期待に応えられる良い大学としていただくとともに、県と大学が力を合わせて、県内に若者が少しでも残りたいと思えるような環境づくりにも取り組んでいただきたい。